

火の勢いが弱くなつて来た……。

ぶすぶすとまだ、小さな炎を上げている燵の中の鐘を残して……真砂の者達は、隊列を組んで……道成寺を出て行く……。
安珍が、鐘の中でどうなったのか……見る勇氣は、真砂の者達にはない……。

まるで、葬儀の列のように、皆が、うなだれている……中には、涙を浮かべているものもいた。

清次は考えていた……。

安珍は、天に昇つただろうか……？

希代と……極楽浄土で再会しているだろうか……？

いや……きつとそうに違いない……。

俺が、死んでも……安珍や希代と会う事は、もうないだろう……。

おれたちが行くのは、地獄だ……。

……俺たちは、罪をおかした……。